

資源からみた衣生活 —— フォーマルウェアに関する意識と実態調査 ——

○学習院女短大 内田直子 文化女大家政 盛田真千子
 仙台白百合短大 千葉よう子 共立女大家政 小林茂雄

〈目的〉 ここ近年、環境問題がクローズアップされ、社会及び生活意識が問題視されているが、衣生活においても大量生産、大量消費など同様の状況が考えられる。今回は中でも行事、儀式などに多く関わっている社会性の高いフォーマルウェアが、家庭内でどのように認識され、またどの程度利用されているものであるのか、その実態を探るために本調査を行った。本報では、特にこれらの問題点に地域差があるのかどうかを明らかにするため首都圏と地方都市（仙台市）の2か所を比較検討した。

〈方法〉 首都圏（115人）と地方都市（113人）に在住する女性（35～50歳代）を対象に、1991年秋、質問紙票によるアンケート調査を実施した。調査内容は、(1)フォーマルウェアの着用の意識に関連する5段階評定26項目と、(2)フォーマルウェアの各々の所持状況（所持枚数、入手方法、保有・処分理由）について調査を行い、(3)環境問題の質問項目を設けた。分析方法として単純集計、クロス集計及び因子分析を用いた。

〈結果〉 調査対象者は40代前半が多く、両地域とも住宅は平均3LDKよりやや大きい程度である。所持枚数をみると、和服は両地域ともほとんど同数に近いが、洋服は全体的に地方都市がどの品目も約1枚程度多くなっている。意識調査では、因子分析の結果、首都圏、地方都市とも、9個の基本的因子が抽出された（固有値1.0以上、累積寄与率は首都圏67.1%、地方都市65.3%）。両地域とも「レンタル意識」「着装管理性」などの共通因子があげられるが、「慣習・伝統性」などは地方都市にのみ抽出されるなど、全体として生活実態は両者ともそれほど変わらないが、意識面にやや違いがみられた。